

ジーキル博士はなぜ自殺したのか

——『ジーキル博士とハイド氏』に描かれた悪「偽善」——

豊 島 冴 子

ジーキル博士はなぜ自殺したのか

— 『ジーキル博士とハイド氏』に描かれた悪「偽善」—

Why did Dr. Jekyll Commit Suicide? :

Hypocrisy, the Hidden Evilness in *The Strange Case of Dr. Jekyll and Mr. Hyde*

豊 島 冴 子

はじめに

旅行記や詩、童謡、短編小説、評論など多岐にわたって執筆活動を行った作家ロバート・ルイス・スティーヴンソンは、1850年11月13日スコットランド、エディンバラで教養ある夫婦の間に一人息子として生まれた。彼の作品の一つである『ジーキル博士とハイド氏』は1886年に出版され、その後多くの人々に読まれることとなる。彼はこの作品で初めて作家としての注目を集めた。舞台や映画、パロディ小説など数々の副産物を生みだしてきたこの作品は、今やその名を知らぬ者はいないとすら思えるほどである。

物語の舞台は19世紀のロンドン。ある日弁護士ゲブリエル・ジョン・アタスは、従兄弟のリチャード・エンフィールドから奇妙な事件の話を聞く。それは、何とも言えず不愉快な容貌をしたハイドという男が子どもを踏みつけにして騒ぎになり、それを収めるためにジーキル名義の高額な小切手を差し出したという内容だった。ジーキル博士は医学や科学、法学に長け周囲の尊敬を一身に受ける存在であり、アタスは彼からハイドに全財産を譲るといふ遺言書を預かっていた。

それから1年後のある日、上院議員のカラーが夜の路上でハイドに殺されるという事件が起こる。その犯行現場にはジーキルのステッキの片割れが残されていた。ハイドには数千

ポンドの懸賞金がかけられたが行方はずかしくない。書齋に籠るようになったジーキルを案じて、アタスがジーキルとの共通の友人であるラニョンを訪ねてみると、彼はかつての面影もなく病人のような姿に変わり果ててしまっていた。その1週間後にラニョンは、「ジーキルが失踪あるいは死亡するまで開封すべからず」と記した2通の手紙をアタスに宛て、帰らぬ人となった。

そしてある晩、突然訪ねてきたジーキルの執事プールに連れられ、アタスがジーキルの書齋の扉を破ると中ではハイドが毒を飲んで自殺していた。そこにはアタスに宛てられた手紙が残されていた。

ラニョンからの2通の手紙とジーキルの書齋にあった手紙の中で明らかとなった真実、それは、ジーキルが薬品によってハイドに変身していたということであった。そして、ハイドを生みだした経緯やハイドが犯した罪の真相、生涯邪悪な欲望から逃れられず、ついにはジーキルとしての元の姿に戻れなくなったということだった。

この作品に関する批評は多く、その内容は多岐にわたっている。その中心となる主要テーマの例としては「父と息子の関係、成人男子の中の思春期の少年、同性愛的恐怖、労働者の性愛化傾向、不能、女性嫌悪と（あるいは）女性恐怖、父権制社会の暗い面、強姦者」（フレイリング、275）などがある。本質的

には悪でありながらも、他者あるいは社会から善人として見られることを強く望む偽善者としてジーキルを考えると、その自殺という最初からは何を読み取ることができるのか。本稿ではヴィクトリア朝における「偽善」に焦点を当て、この観点から「ジーキルの自殺」を考える。

生涯健康が優れなかったスティーヴンソンは幼少期に両親の雇った乳母と多くの時間を過ごす。この乳母との出会いが、彼の宗教観を形成し、想像力を養うこととなった。家庭での厳格な教育や彼の育った街から、スティーヴンソンは「二面性」や「偽善」といったヴィジョンを獲得し『ジーキル博士とハイド氏』を生む。スティーヴンソンがこの物語に描いた偽善とはどんなものだったのか。そして、そこからどのような作者の意図を読み取ることができるのか。

1. ヴィジョンの獲得と誕生

1-1 宗教観の形成 と対立

スティーヴンソンの乳母アリソン・カニングム（通称カミー）はスティーヴンソンが1歳半のときに雇われ、当時29歳だった。彼女は「スコットランドの伝説や怪奇譚のほか聖書物語を熟知しており、スコットランド長老派教会・契約派信徒（Covenanter）の物語にはことのほかこだわった」（立野、215）。幼少時のスティーヴンソンに旧約聖書やバニヤンの『天路歷程』、カルヴァン派の教義や賛美歌などを読み聞かせ、悪魔や地獄、罪の観念などを教え込んだのだ。そのために、当時まだ子どもだったスティーヴンソンはしばしば悪夢にうなされることがあったという（広本、209）。20年ほど後になってスティーヴンソンはこのように振り返っている。「結果としては、カミーはやさしく献身的で忍耐がよかったが、迷信ぶかく、子供の自分に『宗教的思考様式』をつめ込んだことについ

ては思慮に欠けるところがあった」（フレイリング、220）。この言葉からスティーヴンソンが一種の息苦しさを感じていたことが窺える。しかし、スティーヴンソンは乳母を大変慕っていた（後に彼女へ宛てた詩集を出版している）し、彼女はスティーヴンソンの宗教観を語る上では重要な人物である。

スティーヴンソンの父親トマスもまた「厳格な長老派キリスト教徒だった」（広本、208）。長老派とは極めてカルヴァン主義的なプロテスタントの一派で、トマスは息子を善良な人間に育て上げようとした。母親のマーガレットはトマスよりも楽観的で物事を深く考えない性格であったようだが、牧師の父をもっていたためにやはり信仰は篤かった。大学に入ったスティーヴンソンがエディンバラのオールド・タウン（オールド・タウンについては1-2で解説）を徘徊し、娼婦や浮浪者などの下層階級と付き合い始めると、トマスは息子の信仰心を疑うようになった。

そしてスティーヴンソンは大学内にある弁論クラブのメンバーに選ばれ、友人たちとの討論に勤しむようになる。問題はその内容だったのだが「この会での弁論活動は因襲打破的なものが多く、やがてルイスも無神論や社会主義思想に傾倒するように」（立野、217）になったのだ（ルイスはスティーヴンソンを指す）。「父トマスは、一人息子がダーウィンの進化論への支持を明らかにしたときには、怒りを抑えられなかった。トマスにとっては、進化論は無神論や悪魔崇拝とほぼ同義だったからである」（広本、212）。しかし、このような父親との宗教観における対立についてスティーヴンソンは当時次のように語っている。

僕はものごとを笑ってすませる、のんき者になりたいわけじゃない、（かれらが思っているような）軽率な不信心者じゃないつもりだ。信じることにかけてはかれらに劣らない。ただ、全体として逆比

例になっているだけなんだ。(フレイリング、228)

スティーヴンソンは神を疑ったわけでも道徳心を捨てたわけでもなかった。彼の言う「逆比例になっている」とは、おそらく両親に善良な人間として生きることを押しつけられ、自由に思想することを許されないがゆえに反発してしまうということであろう。彼にとって両親から求められた生き方はまさに、彼が何よりも嫌った偽善的な生き方だったのだ。さらにこの頃は「帝国全体での布教活動も活発化しており、厳格な長老派教会の信者であった父トマスも熱心な宗教活動を行っていた」(立野、218)。彼は時代とともに精神的な抑圧の中で周囲への反発を抱えながら青年期を過ごしたのである。

1-2 『ジーキル博士とハイド氏』の誕生

1883年の『宝島』単行本化とそのヒットを受けてさらにその名を世に広めたスティーヴンソンは、1885年には2つの作品を別々の雑誌で同時に連載するなど、ようやく作家としての安定を見せ始めた。『ジーキル博士とハイド氏』の出版は、その翌年の1886年1月である。当時のイギリス社会に反響を巻き起こしたこの作品は、スティーヴンソンがある夜に見た悪夢がもととなって書かれたものだった。その当時の心情と夢の内容を彼は次のように語っている。

わたしは長い間(中略)人間の二重人格という観念を取り入れるための、本体というか容器のようなものを模索していた。(中略)私はプロットをひねりだそうと、二日間、頭を掻きむしらばかりにあがいたあげく、二日目の夜になって夢をみた。例の窓の光景と、その後二回語られる同一の場面、すなわち、犯罪をおかして追跡されたハイドが散薬を手

にして追跡者の目のまえで変身するという場面である。(フレイリング、197)

ここでまず注目しておきたいのがスティーヴンソンの言う「二重人格という観念」についてである。前節で少し触れたが、大学時代にエディンバラ市内を歩き回った経験は社会と人間の二重性という大きなテーマをスティーヴンソンに与えた。18世紀の中頃、中心都市における人口の過密化対策のため行われたのが、郊外での新しい市街地(ニュー・タウン)の建設だった。エディンバラはそのニュー・タウンが造られた最初の都市である。「近代建築の粋を集めて建設されたニュー・タウンは、通りや建物が整然とした景観をなし、啓蒙主義の理念である『秩序』と『優美』を象徴的に表していた」(木村、12)。しかし、それとは対照的に、中世のまま姿を変えずに取り残されたオールド・タウンは「クローズ(close)と呼ばれる細い路地が入り乱れ、パブや売春宿が点在し紳士は立ち入らない場所となった。スティーヴンソンが暮らしていたのはニュー・タウンであったが、その当時は「すでに上流階級はニュー・タウンに、下層階級はオールド・タウンにと、住み分けも進み、一つの街が新旧二つに分裂している状況」(立野、218)だった。

1879年、スティーヴンソンはエディンバラについてのエッセイを出版しており、彼が頻繁に行き来していたオールド・タウンとニュー・タウンとを比較し「明らかな(中略)社会的不平等」(フレイリング、222)という言葉を用いて表現している。実際、中流階級以上の人々が住むニュー・タウンは清潔に整備され便利になっていたが、下層階級の人々が集まるオールド・タウンが住みよく改善されることはなかったようである。しかし、スティーヴンソンはそのオールド・タウンという「社会の宗教的な規律から逸脱」(広本、211)した地域に魅力を感じていた。そこは

無意味な束縛から解放された人々が暮らす場所であり、規律や道徳を何よりも重んじるニュー・タウンに比べ「自由で率直で偽善の少ない地域」(広本、211)だったのである。ここで『ジーキル博士とハイド氏』の物語を振り返ってみると、この2つの地域から受けたイメージは、ジーキルの住む表通りの「堂々とした家並みの一画」(スティーヴンソン、25) “a square of ancient, handsome houses” (Stevenson, 23) とハイドの住むソーホー区の「悪夢にあらわれるどこかの市街の一画」(スティーヴンソン、37) “like a district of some city in a nightmare” (Stevenson, 32) の描写によく反映されている。特にハイド側の描写に関してはジーキル側のそれに比べて圧倒的に文字数も多く緻密であるため、スティーヴンソンがいかにオール・タウンをよく観察していたかが垣間見える部分である。

こうした社会と人間の二面性に触発されたスティーヴンソンは、徐々にその興味を人間の内面における二面性へと移していき、同時に「偽善」の問題をも深く考えるようになる。ここまでは主に『ジーキル博士とハイド氏』における社会的なモデルについて述べてきたが、ジーキルには人物的なモデルがいることにも少し触れておきたい。

14歳のスティーヴンソンはある人物を主人公にした芝居を作った。これは1878年に友人との合作として『親方プロディ、または二重生活』という題名がつけられ、後にロンドンの舞台上で上演された。このプロディという人物こそがジーキルのモデルとなっているのである。プロディは本名をウィリアム・プロディといい、大工・石工組合の組合長及び市議会議員の常任議員であった。しかしそれは昼の顔で、夜になると仲間とともに窃盗を繰り返し、最後には税務局に押し入ったことが明るみとなり処刑された。プロディは18世紀に実在した人物で、彼の物語はイギリス国内で広く親しまれている(フレイリング、223-226)。

このように、スティーヴンソンはかなり早い時期から『ジーキル博士とハイド氏』の核となる社会の二重性や人格の二面性といったテーマを手にしていたのである。

悪夢から物語の着想を得たスティーヴンソンは、まるで何かに取り憑かれたかのように『ジーキル博士とハイド氏』の最初の草稿を3日間で書き上げ、妻のファニーや子どもたちの前でそれを読み聞かせた。しかし、ファニーは当初純粋な物語として書かれたそれが道徳的な教訓を意図した寓話(アレゴリー)として書かれるべきだと指摘した(フレイリング、256-261)。するとスティーヴンソンはすぐさまその草稿を焼き捨て、新たに3日間かけて物語を寓話に書き直した。それが世に知られることとなった『ジーキル博士とハイド氏』の物語である。後にファニーの息子ロイドは当時を振り返って次のように述べている。最初の草稿においては、ジーキルの性格は一貫して悪であり、ハイドへの変身は、ただ変装のために行われるに過ぎなかった(フレイリング、253)。

もはや焼き捨てられた最初の物語を詳しく知る術はないが、悪を際立たせるためには善を描く必要がある。ファニーが指摘したのはまさにこの部分であった。つまり、善と悪を切り分け、ジーキルとハイドがそれぞれを体現するよう表現した寓話にするべきだと彼女は言ったのであろう。二重性や偽善を描こうとするスティーヴンソンの意図をファニーが理解していたかどうかを別にしても、彼女の指摘を取り入れてジーキルを(表面的な)善人として描いたことで、ハイドに変身した際の悪行をより衝撃的なものにすることができた。

2. スティーヴンソンの描いた悪—「偽善」

2-1 『ジーキル博士とハイド氏』の解釈

1886年1月『ジーキル博士とハイド氏』は値段1シリングのペーパーバックとなって売

り出され、その年の9月までにはイギリス国内で3万9千部の売れ行きを見せた（フレイリング、200）。翌年春には早くもアメリカで舞台化され、20世紀に入ってから毎年のように舞台或いは映画化されるようになった。

当時『ジーキル博士とハイド氏』を読んだ多くの聖職者たちは、この物語を人間の善と悪が内面で葛藤する様を描いた寓話であると評価し、教会での説教に用いたこともあった（秋葉、3-4）。つまり、ジーキルは善人であるけれども、善行と悪の誘惑との間で揺れ動き、最終的に後者のほうに屈してしまったがためにその身を滅ぼしたという解釈がなされたのである。人が人生における様々な誘惑に抗うことができないとどうなるのか、ジーキルの物語はそのような教訓をキリスト教信者に伝えるべく活用されたのだ。

また当時の時代的な風潮から、『ジーキル博士とハイド氏』に性的な解釈を持ち込む人々も多く、「ハイドは肉欲にふける放蕩者」（フレイリング、249）であると批評された。出版の翌年に舞台化された際にも、「原作にない2人の女性が登場し、ハイド氏の悪には『暴力』に加え『肉欲』を包含」（秋葉、2）するものであった。事実、原作では少々不自然なほど女性という存在が稀薄で、ハイドによる婦女暴行を示唆する文章も皆無なのである。ステイヴンソンは次の引用で述べているように、ハイドを性に放埒な人物に描くまいと意図していたようだ。

悪はジーキルにある。彼は偽善者なのだ。（中略）偽善者が野獣のハイドを解放するのだ。ハイドはジーキル同様、淫乱ではない。彼は残酷性と悪意、利己主義と怯懦の本質にほかならない。人間にあっては、こうしたものこそが悪魔的なのだ。（フレイリング、249）

しかし、女性の存在を完全に消し去ってし

まったことで新たな誤解を招くことになった。なぜなら当時のイギリスでは主に上層階級によってイギリスの人種の衰退が危惧され、同性愛もその一要素として注目されていたからである。さらに、「二重生活」（double life）という言葉そのものにも同性愛の意味が付与されていたために、男性ばかりの世界が描かれたこの物語は同性愛の罪が含まれるものとして読まれたのである。

ステイヴンソンは物語における悪が偽善者であるジーキルだと断言し、性的な問題に関しても否認している。彼が同性愛に関して述べた記述は全く残っていないため、その点はステイヴンソンの意図するところではなかったと考えるのが自然であろう。醜悪な外見が強調されたハイドの悪性ばかりが注目を集めたが、実際には地位と名誉を両手に持ち周囲からの尊敬を一身に受けるジーキルこそが悪だったのだ。ジーキルは内面の暴力的な欲望を解き放ち、ジーキルとしての体面に傷が付かぬようハイドという姿をもって快楽を貪る作中最大の偽善者であり、悪であるのだ。しかし、結果として当時の読者の多くはその偽善という悪を見抜けなかった。

そして注目しておかなければならないのはステイヴンソン自身のこの作品に対する評価である。かなりの成功を収めた作品であるにも関わらず「ずっとのちに、ステイヴンソンはふと思いついたように、この作品は一番できの悪いものだ、と洩らしたことがある」（スターン、24）という。ステイヴンソンはなぜここまで自分の作品を厳しく批判したのか。前述したとおり、ステイヴンソンが物語に込めた意図と、読者の解釈は必ずしも一致するものではなかった。

ステイヴンソンは『ジーキル博士とハイド氏』を出版した後、様々な批評や反響を受ける中でそのことに気づき、真のメッセージを読者に伝えられなかったこの作品を失敗作と見なしたのである。

2-2 ジーキル博士の偽善

Though so profound a double-dealer,
I was no sense in a hypocrite. (Stevenson, 70)

わたしは甚だしい二重人格者ではあったが、いかなる意味でも偽善者ではなかった。(スティーヴンソン、91)

これは物語の最後の章「本件に関するヘンリー・ジーキルの詳細な陳述書」'Henry Jekyll's Full Statement of the Case'に書かれたジーキルの告白の一部である。このようにジーキルは自分が偽善者であることを否定している。この文章の後に、ジーキルは自分が善行を積んでいる時も暴力的快楽に溺れている時も等しく真剣であったと言い、自らの悪の面を容認しつつ、善の面も強調している。スティーヴンソンはジーキルが偽善者であることを明言していたが、彼が「悪はジーキルにある」(フレイリング、249)と言ったように、ジーキルの本質が悪であるという証拠が次の文章で暴かれている。

The drug had no discriminating action; it was neither diabolical nor divine; it but shook the doors of the prisonhouse of my disposition; and, like the captives of Philippi, that which stood within ran forth. (Stevenson, 74)

薬そのものはなんら差別的な作用はなかった。それは神を生むものでも悪魔を生むものでもなかった。ただ単にわたしの気質を閉じ込めている獄舎の扉を揺すぶるに過ぎず、閉じこめられていたものがフィリップパイ市の囚われ人のごとく走り出てきただけのことである。(スティーヴンソン、97)

この告白によれば、彼の姿をハイドへと変

えた薬には悪の部分分離するという作用があったのではなく、一人の人間が本来閉じ込めている内在的な性質を呼び覚まし、それを別人格として個性化するものであったという。つまり、ジーキルが本質的に善者であったならば彼はハイドという悪魔的な個性に変身するのではなく、善を体現したような天使的な個性を生み出したはずなのである。これで、ジーキルが本質的に悪であったことは明らかになった。

そして、ジーキルが偽善者であるということはスティーヴンソンの発言を別にしても、「そして機会があれば、ハイドの犯した悪事を、機会あるごとに急いで償いさえたのであった」(スティーヴンソン、100) "he will even make haste, where it was possible, to undo the evil done by Hyde" (Stevenson, 76) という文章や「わたしは自分と他人をくらべてみた。慈善のために活動している自分と、冷酷に無関心にぶらぶら怠けている他人をくらべてみて、わたしは微笑を禁じ得ないのだった」(スティーヴンソン、111) "I smiled, comparing myself with other men, comparing my active goodwill with the lazy cruelty of their neglect" (Stevenson, 82-83) という文章を見ても明らかである。善行は自らの犯した罪を償うために行うものではなく、何もしていない者と比較して優越感を得るためのものでもない。ジーキルはスティーヴンソンが言うまでもなく偽善者である。

さらにこの問題を補足的に理解できる点がある。それは彼が体面を気にする性格であったということだ。物語に登場する主な人物は皆中産階級に位置しており、ジーキルもその一人だ。19世紀の中産階級には医者や弁護士、公務員や聖職者などが含まれるが、上流階級のように働かずに生活できる程の余裕はなかった。中産階級の人々は優雅な上層への憧れを抱くようになり、自分の家がいかに上層に近

く、周囲の尊敬に値するかということのアピールするようになる。それはリスペクタビリティと称され、高級家具がどれだけ家の中にあるか、召使いを何人雇っているか、またはどれほど慈善活動を行ったり、社交パーティーを開いたりするかなどの点において誇示された（木内、126-128）。

物語を振り返ってみると、まず弁護士のアタスンに関しては自宅に一人暮らしとされ、事務所の描写もあるが、そこに高級な家具は描かれていない。そして仕事上のパートナーである書記は登場したが、召使いの存在は認められない。アタスンが慈善活動を行った、或いはパーティーを主催したという記述もない。次に医学博士のラニョンには召使いが一人いることがわかるが、家具に関する描写はなく、彼による慈善活動及びパーティーの主催も描かれていない。

ではジーキルはどうだろう。彼にはプールという名の執事の他、女中、女料理人、ナイフ研ぎのボーイ、馬丁がいる。これら召使いの全体的な数を表すものとして「召使たちが全部、男も女も、まるで羊の群れのように一かたまりになって集まっている」（ステイーヴンソン、60）‘the whole of the servants, men and women, stood huddled together like a flock of sheep’（Stevenson, 49）という記述もある。そして家具に関してもジーキルの邸には「樅材製の高価な用筆筒」（ステイーヴンソン、26）‘costly cabinets of oak’（Stevenson, 24）や「マホガニー製の寝台」（ステイーヴンソン、102）‘the mahogany frame’（Stevenson, 77）があり、ハイドが出入りしているほうの建物に関してもこのような描写がされている。

... furnished with luxury and good taste ... the plate was of silver, the napery elegant; a good picture hung upon the walls ... and the carpets

were of many plies and agreeable in colour.（Stevenson, 33）

家具は贅沢で凝ったものであった。（中略）食器は銀で、テーブルクロスも高雅であった。壁には立派な絵がかかっていた（中略）絨毯は、幾枚も織り合わせた厚手のもので、色合いも感じがよかった。（ステイーヴンソン、39）

また、ジーキルは周囲に慈善家として知られており、晩餐会も物語では2度開いている。ステイーヴンソンはジーキルにこれらのような描写を加えることで19世紀の中産階級独特の人物像を詳細に表現していたのである。

ステイーヴンソンはジーキルが偽善者であると言ったが、果たしてそれはジーキルだけなのだろうか。他の登場人物たちは全くの善人であったのか。アタスンに関しては次のように描写されている。

He was austere with himself, drank gin when he was alone, to mortify a taste for vintages; and though he enjoyed the theatre, had not crossed the doors of one for twenty years.（Stevenson, 9）

身を持することは謹厳で、ひとりのときには一杯の葡萄酒をたしなむことさえ差控えてジン酒をのみ、芝居ずきであるのに二十年来、劇場の木戸をくぐったことがない。（ステイーヴンソン、5）

このように禁欲的でヴィクトリア朝の社会風潮から考えると実に模範的な人物のように見えるゲブリエル・ジョン・アタスンにも体面を意識する様が描かれている。彼はジーキルの身に起こっている不幸について考え、それは若かりし頃の過ちからくる天罰に違いないと思いつく。そして思わず自分の過去も振り返り汚点がないか確認する。ここからはア

タスンが決して完璧な人物ではないことが分かる。彼もまた自分が犯したかもしれない罪の発覚を恐れているのであり、それは自らの体面を守りたいという意識でもある。

物語の登場人物のほとんどが位置する中産階級は「教養を深め、中庸の精神を培い、奢らず、華美、過度に走らず、信条的には puritanism (清教徒主義) を奉じ、自己の抑制、他人への無干渉、事に当たっては compromise (妥協) (熊崎、3) を旨としていた。この「他人への無干渉」をまさにモットーとして掲げている人物がアタスンの従兄弟、エンフィールドである。エンフィールドはハイドが子どもを踏みつけにする場面に居合わせた人物であり、その時ハイドがジーキル名義の小切手を出したことから、ジーキルとハイドの繋がりを知る一人でもある。彼はこの事件についてアタスンに話した後、次のような台詞を述べている。「わたしは主義としてこうきめているんです (中略) 怪しく見れば見えるほど、なおさら穿鑿はしないことだ」(スティーヴンソン、13) 'I make it a rule of mine: the more it looks like Queer Street, the less I ask' (Stevenson, 14)。つまりは他人事に干渉し、無用な不利益を被りたくないのであり、それが品位を保つ行動でもあるということであろう。しかしそれは同時に不幸に見舞われているかもしれぬ人を見て見ぬふりすることでもある。スティーヴンソンはジーキルだけでなく他の登場人物にも偽善的な面を持たせることで社会全体の偽善をも示唆しているのである。

2-3 ジーキル博士の自殺

物語の主人公であり、最大の悪であるジーキルの最期は実にあっけないものだった。しかもヘンリー・ジーキルの姿ではなく、エドワード・ハイドの姿で自らの命を絶った。アタスンとプールはジーキルの書斎に押し入る時それぞれ武器を持っていたのだから、ハイ

ドとなったジーキルはこの2人によって殺されてもおかしくはなかつたろう。ではなぜジーキルは自殺したのだろうか。それは予期せぬ来客による動揺のため衝動的な自殺だったかもしれない。しかし「ほとんどのヴィクトリア朝の人々にとって自殺には何か破壊的なところがあり、何かを抑圧し、すばやく葬り去ることを強要するところがあった」(ゲイツ、5) ように、ハイド＝ジーキルという事実を咄嗟にジーキルが隠そうとしたとも考えられる。「ハイドは、たとえ彼を隠すためには死が必要であるにしても、隠さねばならない。そしてジーキルは二重性の完全な発覚を避けるためには結局自分自身の殺害者にならねばならない」(ゲイツ、212) というゲイツ氏の答にもあるように、偽善者であるジーキルが体面を守るためには何としてもハイド＝ジーキルという事実の漏洩を防ぐ必要があったのだ。つまりジーキルはその死をもってしてまで地位や名誉、周囲からの尊敬に沿った表向きの人格を守ったのである。

1916年までイギリスにおいて自殺は法律違反であり、不道德な行為として見なされていた。自殺者の財産は国王のものになることが定められ、1880年代までは教会の墓地に自殺者を埋葬することが禁じられていたために、中産階級の人々は家族が自殺した場合、それを何としても隠蔽しようとした。もし自殺者が一家の稼ぎ手であった場合、残された家族は貧困の一途を辿ることとなる。しかし、「ヴィクトリア朝のイギリスでは、貧困は恥ずべきこと、罪である」(木内、3) とまで考えられていた。財産の没収を逃れるためには自殺者が発狂していたと申告しなくてはならず、その場合一族に狂人を出したという汚名を一生背負わなくてはならなかった。つまり、ヴィクトリア朝の社会において自殺は本人にとっても家族にとっても大変な不名誉であったのだ(ゲイツ、65-67)。しかし、ジーキルはハイドの姿で自殺を遂げることにより

このような不名誉を回避することができた。ハイドの姿になればその時点で世界にジーキルの存在は無くなる。そしてハイドとして自殺をすれば世界にとって死んだのはハイドであり、ジーキルではないのだ。そうすればジーキルは永遠に行方不明のまま、実際は自殺したにも関わらずジーキルという人物には不道德な自殺者や狂人といったレッテルが張られずに済むのである。また、ジーキルはハイドとして死に、遺言状の遺産相続人をハイドからアタスンに書き換えた。こうすることで自殺した際ジーキルは姿を消し、遺言状にあるとおりジーキル失踪の場合の遺産譲渡が施行される。これによってジーキルは財産を親友に託すという善行を残すことができたのだ。こうしてジーキルは最期まで己の本質を周囲に隠し通し、不名誉を被ることなくジーキルという人物を葬ったのである。

ジーキルはハイドを生み出してからというもの徐々に本来の姿であるはずのジーキルを「避難の都市」(スティーヴンソン、109) “my city of refuge” (Stevenson, 82) であると思うようになった。それはつまり、ハイドがどれだけ罪を犯して追われる身になったとしてもジーキルの姿に戻りさえすれば自分に災難がふりかかることはないということである。ジーキルは完全にハイドとしての生に喜びを見出していたのであり、それと同時にジーキルとしての自己を単なるシェルターほどにしか考えなくなったのだ。ハイドになると今度は追っ手を逃れ、昼の生活に戻るべくジーキルの姿になってハイドという存在を世界から消す。そうすればジーキルとしての自分は何不自由ない裕福な暮らしに戻り、それまでと変わらない輝かしい生活を再び送ることができるのである。

ジーキルが最期に残した封筒の中身は新しく書き直した遺言状と、託された手紙を読むよう指示する内容の簡単な手紙、そしてジーキルによる事の詳細が書かれた手紙だった。

もはや薬無しでは自然とハイドに変身してしまうようになったジーキルが自身の人格の消滅を感じ取り、最後の薬でジーキルとしての人格を保っている間に書いたのがこれら3通の手紙なのである。ジーキルはこの手紙を書く時点で、自分の人格が完全にハイドに乗っ取られるのだと気がついており、それと同時にジーキルとしての人格が永遠に消滅しつつあることも理解していた。そしてそれらの手紙はアタスンとプールが押し入ってくる前に書き上げられ、ハイドに変身してしまったジーキルは2人が書斎のドアを破った瞬間に毒を飲んで自殺した。この時、ジーキルはハイドに変身して間もなかったのか、かろうじてジーキルとしての意識は保っていたことが分かる。なぜならもし完全にハイドになっていたなら、自殺などできなかつたからだ。

But his love of life is wonderful; I go further: I, who sicken and freeze at the mere thought of him, when I recall the abjection and passion of this attachment, and when I know how he fears my power to cut him off by suicide, I found it in my heart to pity him. (Stevenson, 87)

しかし、ハイドの生への執着は驚くべきものであった。さらに進んで言えば、ハイドを思うだけでも胸がむかつき寒気を感じずるわたしではあるが、この卑劣にして熱烈なるかれの生への執着を思うとき、また、自殺によってかれを切り離し得るわたしの力をかれがいかに怖れているかを知るとき、わたしは心中かれを憐れむの情に堪えないのである。(スティーヴンソン、117-118)

このようにジーキルが述べているとおり、ハイド側は生を享受したいと望んでいるのであり、自殺はジーキルが行使できる唯一の破

滅の手段だったのである。

そして、ジーキルもハイドも2人で1人だということを忘れてはならない。ハイドはあくまでもジーキルの人格の一部にすぎないのである。本来一体であるはずの人格が分裂することで、ジーキルはハイドになる度に、またハイドがジーキルになる度に人格の一部を押し殺すという一時的な自殺を繰り返していたということになる。人間はもともと複数の人格から成り立っており、それらが共存することで1つの人格が形成されている。だからこそ時に人は悩み、迷い、葛藤するのであろう。そこでもう一度上の引用部分を見てみると、ジーキルは自己の本質を解放して自由に生きたいと思う反面、それは自らの手で築き上げてきたジーキルの名誉ある人生を破壊する行為であるためそうするわけにはいかないのだという彼の想いが見えてくる。人格を2つに分離させたジーキルはいわば自己の破壊者である。最終的にジーキルは元の姿に戻ることができなくなり、ハイドを完全に別人格として認識するようになってしまう。「『かれ』とわたしは言う。どうしても『わたし』とは言えないのだ」(スティーヴンソン、114) “He, I say...I cannot say, I” (Stevenson, 84)。

ジーキルとしての体面を守りながらも自らの本質的な欲求を満たしたいという偽善的精神に基づいたジーキルの願いは自己の人格を二分し、ハイドを生み出すに至った。しかし、本来複数の人格から成り立っているはずの人間にとって、それは自己の破壊を意味していたのである。ハイドとして邪悪な快楽を貪っては、平然とジーキルとしての生活に戻り輝かしい名誉を享受し、罪滅ぼしとして慈善活動を行うという生活を続けた結果、ジーキルはついに人格の均衡を保てなくなった。ハイドの姿から戻ることができなくなったジーキルは、自らが犯してきた罪の露見を怖れるあまり、衝動的な自殺という最期を遂げたので

ある。

むすび

作家ロバート・ルイス・スティーヴンソンは、学生時代にエディンバラのオールド・タウンを徘徊するようになり、そこに住む人々と交流を交わすようになった。そのオールド・タウンと自分が住むニュー・タウンとを往来する間に、社会の二面性を感じ取り、自分が育った階級の偽善的精神を知ることとなった。スティーヴンソンは両親が宗教精神に則って勤める生き方を偽善的であると嫌い、父親の家業を継ぐことも拒否して作家になる道を選んだ。

ファニーとの結婚後、作家として初めて経済的な余裕をもたらした『ジーキル博士とハイド氏』の出版は世間から大きな反響を呼ぶこととなる。ある一人の紳士が不思議な薬によって姿を変え、悪行を繰り返した後、自殺による最期を遂げるという物語は道徳や規律を重んじるヴィクトリア朝社会にとってはセンセーショナルだったのである。

しかし、当時の批評はスティーヴンソンが作品に込めた意図に沿ったものではなかった。彼はただ単にジーキルの二面性を描いたのではなく、そこに映るジーキルの偽善を描いたのであった。スティーヴンソンは自身のエッセイの中で人間なら誰もが持っている人格の二面性についてこう語っている。

我々はたえず熱愛と嫌悪をシーソーのように感じつつ、対立しあう性癖と代わるがわる妥協して生きるのではなく、その性癖がもはや対立せず相互に助け合う共通の目的に向かうなんらかの道を捜すべきなのだ。(ゲイツ、212-213)

生涯自己の悪に染まりたいという本質を隠し続け、周囲の尊敬や名誉を勝ち取るために

善行を積んできたジーキル。しかし、彼の行った善はハイドを生み出し悪を行うことで偽善的な要素を一層強めた。彼は自らの体面のため、或いはハイドが犯した悪の罪滅ぼしのためという偽りの善意をもって善行を行ったのである。それは最終的に自らを偽ることとなり、ジーキルとハイド両方の生を歩むうち、次第に人格はハイドの側に飲み込まれてしまった。最期は自殺という手段をもってジーキルの命共々ハイドの命をも奪い、ハイドによってジーキルの人生に傷が付けられるのを防いだのだ。こうして最期まで偽善に彩られたジーキルの生涯は、自己を二分しハイドを生み出したことで徐々に破滅へと向かっていった。

常に複数の自己がせめぎ合い成り立っている人間の心は分裂することで崩壊してしまう。人間が生きていく上で大切なことは、いかに心の均衡を保っていけるかにあるのだ。ジーキルは社会的、人間的な体面を気にしすぎるあまり、もう一つのハイドという自己を抑圧しなければならなかった。その自由と解放を望んでハイドに肉体を与えたのだ。しかし彼は繰り返しハイドに変身することで、ついには心の均衡が取れなくなったのである。

作者スティーヴンソンはヴィクトリア朝の中流階級という背景を描きながら、必要以上に体面を取り繕うことを求める社会風潮にその批判の目を向けていた。そして、人間の偽善が招く自己破壊に警鐘を鳴らしている。彼が描いた物語の主人公ジーキルは偽善によってハイドを生み出し、偽善によってハイドと共に滅んだ。自殺という最期は、ジーキルの体面を守りたいという強い偽善的欲望を締め括るにふさわしい物語の結末だったのである。

引用・参考文献

Stevenson, Robert Louis. *The Strange Case of Dr. Jekyll and Mr. Hyde and The Suicide Club*. London: Puffin Books, 1985.

- 秋葉敏夫『『ジーキル博士とハイド氏』を読む—作品の限界』文教大学大学院言語文化研究科付属言語文化研究所編『言語と文化』第18号、2005年、1-17頁
- 大野一之「目を開けて見る悪夢『ジキル博士とハイド氏』の映画化をめぐる」愛媛大学人文学会編『人文論叢』第8号、2006年、79-91頁
- 荻野昌利『歴史を〈読む〉—ヴィクトリア朝の思想と文化』英宝社、2005年
- 春日武彦「多重人格はなぜ人を魅了するか 解離—現代と解離」日本評論社『こころの科学』第136号、2007年、91-95頁
- 河内恵子『深淵の旅人たち—ワイルドとF.M.フォードを中心に』慶應義塾大学出版会、2005年
- 木内泉「ヴィクトリア朝社会における中流階級の理想と女性解放運動—女子の教育の向上をめぐる」英米文化学会編『英米文化』第26号、1996年、125-144頁
- 木村正俊「文学者にとってのエディンバラ—想像力を喚起する都市」木村正俊編『文学都市エディンバラ—ゆかりの文学者たち』あるば書房、2009年、1-22頁
- 桐山恵子「紳士のような猿、もしくは猿のような紳士—『ジキル博士とハイド氏』における嫌悪の分析」和歌山大学経済学部編『経済理論』第340号、2007年、1-14頁
- 熊崎久子『英米の文学—19世紀から世紀末を越えて』青山社、2002年
- ゲイツ、バーバラ・T『世紀末自殺考—ヴィクトリア朝文化史』桂文子他訳、英宝社、1999年
- 坂田薫子「イギリス十九世紀末小説の怪物たち(1)—『タイム・マシン』、『モロー博士の島』、『ジキル博士とハイド氏』、『ドリアン・グレイの肖像』について」京都教育大学編『京都教育大学紀要』第102号、2003年、23-37頁
- シーマン、L. C. B.『ヴィクトリア時代のロンドン』社本時子・三ツ星堅三訳、創元社、1987年
- 杉山洋子「分身物語考—『ジキル博士とハイド氏』再読」関西学院大学人文学会編『人文論究』第42巻、第4号、1993年、29-43頁
- スターン、G. B『スティーヴンソン 英文学ハンドブック—「作家と作品」No.22』日高八

- 郎訳、研究社、1956年
- スティーヴンソン、ロバート・ルイス『ジーキル博士とハイド氏』田中西二郎訳、新潮社、1967年
- 立野晴子「ロバート・ルイス・スティーヴンソン—光と混沌の街エディンバラを愛す」木村正俊編『文学都市エディンバラ—ゆかりの文学者たち』あるば書房、2009年、213-232頁
- 広本勝也「R.L スティーヴンソンの生涯—父性との葛藤」慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会編『慶應義塾大学日吉紀要 英語英米文学』第46号、2005年、207-241頁
- フレミング、クリストファー『悪夢の世界—ホラー小説誕生』荒木正純・田口孝夫訳、東洋書林、1998年
- 益子政史『ロンドン悪の系譜—スコットランド・ヤード』北星堂書店、1988年
- マックウィリアム、ローハン『19世紀イギリスの民衆と政治文化—ホブズボーム・トムスン・修正主義をこえて』松塚俊三訳、昭和堂、2004年
- 山本卓「『ジーキル博士とハイド氏』における進化と倫理の言説」金沢大学教育学部編『金沢大学教育学部紀要 人文科学・社会科学編』第51号、2002年、15-25頁